

紙版 ハコブネ×ブックス vol.11

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐwebサイトです。



テラプト先生がいるから

Because of Mr. Terupt.

作者 ロブ・ポイエー
 翻訳者 西田佳子
 出版社 静山社
 発行 2013年7月
 ISBN 978-4863892163



大きな事故をひき起こします。瀕死の先生を前に、それぞれ責任を感じながら、先生の安否を心配する七人の子どもたちの言葉で物語は綴られていきます。テラプト先生は生還できるのか。是非、安否を確かめてください。

テラプト先生は新任の若い男性です。学生時代にはレスリングをやっていたスポーツマンですが、まさかと思うような成り行きで、死にそうな状態に陥ります。新学期、生徒たちの前に現れたテラプト先生は、ユニークな授業やプロジェクトで生徒たちを巻き込んでいきました。どんどんと生徒に関わっていく先生は、これまでに子どもたちが自分の世界に閉じ込めていたものを、すこしずつ解き放つていきます。子どもたちに色々な機会を与え、自分で考えさせようと、まずは委ねて様子を見る。ただ、そのタイミングを誤ったことが大きな事故をひき起こします。瀕死の先生を前に、それぞれ責任を感じながら、先生の安否を心配する七人の子どもたちの言葉で物語は綴られていきます。テラプト先生は生還できるのか。是非、安否を確かめてください。

特集 先生が死にそうです。

先生が死にそうだなんて、生徒である子どもたちには手に負えない深刻な状況です。先生が死にそうな物語では、先生はたいてい死にます。回復の見込みがない重篤な状態にいるからです。子どもたちはこの事実に向き合い、苦しみます。身近な人の死を受けとめることの重さや、大切な人を失うことの痛手を大人は知っています。子どもには、まだ触れて欲しくない領域です。とはいえ、子どもたちを死から、ただ遠ざけておくべきなのか。このテーマの物語は、子どもたちが死に對峙するケーススタディとしてだけではなく、人の生を尊ぶ大切さを読者に伝えてくれます。登場する先生たちは、みんな人間としての魅力に溢れた素敵な人たちです。そんな人もまた死ぬのです。子どもたちは瀕死の先生に何を贈り、何を遺してもらったのか。物語には残された時間の輝きが繋ぎとめられています。先生と生徒たちの最後の時間を見守っててください。



アップルbaum先生にペゴニアの花を

A begonia for Miss Applebaum.

作者 ポール・ジンデル
 翻訳者 田中美保子
 出版社 岩波書店
 発行 1998年6月
 ISBN 978-4001156218



レポーターは、語り手を交代しながら、互いを意識しつつ、その複雑な想いを伝えてくれます。先生が最後だったのか。若い心が成長していく瑞々しい青春小説です。

生物のアップルbaum先生が、突然退職してしまつたことに驚いたヘンリーとゼルダ。六十二歳ながら、生徒を驚かせる不思議なユーモアの持ち主の若々しい先生を二人は大好きで、今期も先生の実験助手に志願しようとしていたところなのに、心配した二人が先生の家を訪ねると、先生は弾けるように元気で、馬鹿馬鹿しい遊びにばかり二人をつきあわせまわります。二人を色々なところに引き回し、おかしい体験をさせたがる先生の病気が、既に手遅れのものであると知ります。幼なじみの二人によるアップルbaum先生の死にまつわるレポーターは、語り手を交代しながら、互いを意識しつつ、その複雑な想いを伝えてくれます。先生が最後だったのか。若い心が成長していく瑞々しい青春小説です。



カーネーション・デイ

Ms. Bixby's Last Day.

作者 ジョン・デヴィッド・アンダーソン
 翻訳者 久保陽子
 出版社 ほるぷ出版
 発行 2018年4月
 ISBN 978-4593535316



担任している六年生が残り一月で卒業するという時に、検査でガンが見つかったビクスビー先生。卒業と一緒に迎えられないどころか、二度と学校に戻れない可能性もある生存率の高くない部位のガンです。プロのマジシャンになりたかったなんて変わった人で、きびしく、やさしく、ユーモアがあって、生徒の良いところを見つけて出してくれる人。そんなビクスビー先生が最後に学校にくるはずだった日、先生の様態は悪くなり、入院して特別集中治療を受けることになりました。先生に伝えたい言葉があったブランドは、友人のトファーとステイブを誘って学校をサボり、先生の入院している病院に行き、先生の望みを叶えようとしています。大切な人のために真っ直ぐに突っ走る少年たちの一途さとナイーブ。彼らの想いがあふれる、切なく愛おしい物語です。



モリー先生との火曜日
 (ミッチ・アルボム)
 NHK出版 1998年



医師から自分が死に至る病に侵されていることを宣告されたモリー先生は、これからどの時間をどう生きるかを考えます。残された人生を輝ける時間のようにと決意した先生に、失意に沈むかっつての生徒は教えられます。迫りくる死と對峙しながら、生とは何かを最後まで考え続けたモリー先生の「人生の意味」についての最後の講義録です。

クララ先生、さようなら

Klaras Kiste.

作者 ラヘル・ファン・コーイ
 翻訳者 石川素子
 出版社 徳間書店
 発行 2014年9月
 ISBN 978-4198638665



クララ先生の病気はもう治らない。治療を諦めたクララ先生は、それでも人生を諦めてはいません。残された時間をより良く生きるために、先生は病院から教え子たちの待つ小学校に戻ってきました。もう教えることはできない先生は、教室の後ろに置いた寝いすで生徒たちを見守り、毎日、本を読み聞かせます。子どもたちは、奇跡が起きて、先生が助かることを祈ります。でも、六十歳の先生は、奇跡は小さな子どもの上には起きれば良いのだと言っています。子どもたちは死をどう受け止めるべきか。生徒の親たちもまた当惑します。死から目を逸らさず、生きている時間を誰かと楽しく共有すること。人生の終わりの時を迎えようとする先生と共に、その最後の時間まで、子どもたちが寄り添い奔走していく姿が胸を打ちます。

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.11

2020年4月1日発行 ●発行人 きむらともお

事務局系社員。趣味で児童文学紹介サイト ハコブネ×ブックス (非営利) を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、諸々を受賞。



Twitter 連携しています。

© tomoostretch